



寒椿

# 町内会短信 2月号

2024年2月1日 川沿中央第一町内会長 金山征晴

如月

今年の正月は天候も穏やかでゆつたりと新年を迎えることが出来ると思いました。短信にもそう書いた気がしますが、元旦早々衝撃的な震災の報道があり、たたみかけるように航空機事故。心配な新年の幕開けとなりました。世界のニュースを見ても心配な報道が絶えません。しかしそんな心配事に惑わされずに、身近な地域の問題について気を抜くことなく営んで行くよう肝に銘じてゆきたいものです。

令和6年1月・2月の活動報告及び活動予定については下記の通りです。

## 1月の町内会活動報告

- 1月10日(水) 町内会資源回収
- 1月24日(水) パートナーシップ覚書(契約)
- 1月28日(日) 新年会(つぼ八)
- 1月29日(月) 資源回収実績報告提出

## 2月の町内会活動予定

- 2月14日(水) 資源回収
- 2月16日(金) 防災講座
- 2月9日(金) パートナーシップ排雪開始(→2月13日(火)終了予定)

パートナーシップ排雪は降雪状況や他地域の進捗状況によって、日程が変更になることがあります

## コラム

### 川沿の小窓から(22) 川沿中央第一町内会 相談役 柴田田鶴子

年頭で今年は『昇龍の年』と書きましたが、年明け元日から龍も尻込みするような巨大地震が石川県能登地方で発生、お正月気分も吹き飛んでしまいました。テレビ取材で「神様って不公平や、悪いことしている人達に罰当たえんで、何で、真正直に一生懸命生きている俺たちをこんな目に逢わすんじゃ」と涙ながらに、子、孫、妻を住宅で圧死させ、ひとり生き残ったおじさんが涙ながらに訴えていました。2,3回旅行で訪れた北海道にはない歴史を感じさせる能登、朝市で顔なじみになった渋柿染めのバッグや帽子を作る老夫婦…。テレビに写し出される煙のくすぶり続ける朝市の焼け跡を観ながら、涙が溢れてきました。正月早々流されるニュースは、裏金問題、芸能人の不祥事、そして未だ余震の続く能登地方のニュース、追い討ちをかける全国的な雪害。打ちひしがれた私の脳裏に、会社員だった頃、書を嗜む先輩の言葉を思い出しました。「今辛いでしょ。でも辛の字に一字足すと辛になるでしょ。辛い時は辛に変える一を見つけられれば？ 若さも一、健康も一、正義感も一、諦めない心も一、」…。そうたまたま被災地への募金で一 !!

## 郷土史より『藻岩地区の農地の変遷』(2)

郷土歴史家 吉田邦行



### 八垂別移住農家入植年代別戸数

明治～大正	川 沿	南 沢	中の沢	北ノ沢	合 計
19～28	5	8	2	0	15
29～38	15	45	11	21	92
39～T4	16	20	23	29	88
T5～14	2	6	7	7	22
計	38	79	43	57	217

上記の表から八垂別は、奥の方から入植が進展していることが判断される。これは山鼻屯田兵村の給与地(追給地及び共有地)と、琴似屯田兵村の共有財産地を避けて入植地を求めたためである。屯田兵の給与地は、屯田兵条例により30年間の売買が禁止されていたが、これら屯田兵の中には、売買の契約書のみにて給与地を手放す者がいた。このことにより、一般人が所有権を得て自作農として八垂別へ入植する者と、屯田小作人として入植する者との漸次開墾が進められた。明治30年「北海道国有地未開処分法」の制定より、民間人入植者にその門戸を大きく開いた。これによって国有地を拝借し、永住人(北海道の戸籍人別に入っているもの)が、開墾した拝借地は私有地として認められた。八垂別の琴似・山鼻屯田兵村の公有財産地以外の残余の国有未開地は、漸次入植民間人に払い下げられた(畑作農家には約5町歩)。

八垂別給与地の開墾は遠隔地のため、まったく進展しなかった。明治25年、177区画に割り振りを終え保存登記が完了し、よって給与地・追給地は個人所有が確定した。その後、明治35年の調査では区画地262町歩のうち開墾されたのは、わずか5%であった。この様に全く進まぬ開墾に転機が訪れた。それは明治37年に屯田兵制度が廃止されたことである。これによって条例により30年間の売買が禁止されていた給与地、追給地は、自由に小作地としての貸付及び正式に売買が可能となり、入植して開墾する戸数が急増した。また、明治39年には琴似屯田兵村の共有財産地を、遠隔地にあるため管理上困難と認められ、133町5反歩を当時、味噌・醤油醸造業の斎藤甚之助に一括売却された。同氏は農場を開墾し多数の小作人を使用した。

むかしの八垂別は、熊の巣とも陸の孤島とも言われたがその根拠とは、昼なお暗い原生林が生い茂る八垂別で、猟師・小倉左吉は99頭の熊を射止めたという。また、陸の孤島と言われた根拠とは、その頃を中心部に繋がる道路は、川とそんなに高さが変わらず、雨が降ると水がつきやすい状態でした。ですから雨の日、冬期間など町への行き帰り藻岩山の崖淵を命がけで歩いたそうです。また、獣道と同様の幅狭くぬかるみの道であったからです。(次号につづく)

訃報

森廣三さん(83歳) 川沿9の4 令和5年12月31日ご逝去